

話題開始部／終了部で用いられる 言語的要素

—— 母語話者及び非母語話者の情報提供者の場合 ——

中 井 陽 子

キーワード

母語話者・非母語話者・話題開始部・話題終了部・情報提供者

1. はじめに

日本語母語話者が非母語話者と話す際、非母語話者の反応が何か物足りない、または、唐突な感じを受けたことはないだろうか。その原因の1つは、非母語話者が話題を転換するための言語的要素をうまく用いられないため、話題に対して同意要求したり感想を述べたり、話題と話題のつながりを示したりして、会話に参加していないからであると考えられる。そのため、自分の話題を適当に終わらせたり、次の話題に唐突に入ったりして、自分の意図しない否定的な印象を与えてしまう場合がある。このようなことから、会話におけるコミュニケーションをより円滑に進めていくためには、文法能力だけでなく、いかに話し手や聞き手として会話に参加しながら話題を開始し、終了していけるかという談話能力も必要であると言える。このような点を考慮に入れ、Kato [Nakai] (1999) では、初対面の母語話者同士と母語話者／非母語話者が日本語の会話をする際、話題開始部及び終了部においてそれぞれがどのような言語的要素をどのように用いるのかについて比較分析した。本稿は、そのような総合的研究の一部である、

情報提供者が話題開始部と終了部で用いる言語的要素に焦点をあてて分析するものである。また、最後に、本稿で得られた分析結果に基づき、日本語教育において、会話での話題の始め方・終わり方について、どのような点に注意して指導し、学習者の会話への参加の仕方の方法を広げていくべきか、その手がかりを考察する。

2. 先行研究

ザトラウスキー (1993) は、情報提供者と協力者の区別について、次のような発話機能の用いられ方をもとに定義している。情報提供者とは、主に、注目要求、談話表示、情報提供、意志表示、同意要求、単独行為要求、共同行為要求、言い直し要求、関係作り・儀礼、同意の注目表示、自己注目表示等の情報提供に関する発話機能を用いる参加者のことを指すとしている。また、協力者とは、主に、情報提供者に協力し、情報要求、言い直し要求、言い直し、関係作り・儀礼、継続、承認、確認、興味、共感、感情、感想、否定、終了の注目表示等を用いる参加者のことを指すとしている¹⁾。(1)のように、ザトラウスキー (1993) は、お茶会の誘いの談話において、用いられる発話機能によって情報提供者と協力者を区別して分析している。勧誘者である N は、11N「あのね?」という注目要求や、13N、14N、17N、19N の情報提供等の発話機能を用いているので、情報提供者であるとしている。一方、被勧誘者である I は、12I、15I、18I の注目表示や、16I の「いつ?」という情報要求等の発話機能を用いているので、協力者であるとしている。なお、1つの会話における情報提供者と協力者の役割は絶えず入れ替わり、固定していないとしている。

1) 発話機能の詳しい定義については、ザトラウスキー (1993) 参照。

(1)	勧誘者の発話機能 [情報提供者]	被勧誘者の発話機能 [協力者]
11N あのね?	注目要求	
12I うん。		(継続)の注目表示
13N あの一ー、も、多分、い、ん、 どうかなあと思うんだけど、	情報提供	
14N またお茶会があるだけ//ど、	情報提供	
15I うん。		(継続)の注目表示
16I いつ?		情報要求
17N ええと、7月の3日。	情報提供	
18I 7月のみっ//ーか。		(確認)の注目表示
19N うん。	(同意)の注目表示・情報提供	

(ザトラウスキー1993 別冊:20)

このような情報提供者と協力者の区別²⁾をもとに、中井(2003a)では、母語話者同士の会話において、情報提供者と協力者が話題開始部と終了部でそれぞれどのような言語的要素を用いているかについて分析している。また、Nakai(2002)では、母語話者同士と母語話者/非母語話者の会話において、協力者が話題開始部と終了部でそれぞれどのような言語的要素を用いているかについて分析している。これらの分析に関連して、本稿では、母語話者同士と母語話者/非母語話者の会話において、情報提供者に焦点を当てて、話題開始部と終了部でどのような言語的要素を用いているかについて分析する。

2) 初対面の会話における情報提供者と協力者の詳しい説明は、Kato [Nakai] (1999), 中井(2003a) 参照。

3. 調査方法

3.1 会話資料

本稿で分析した会話資料は、二人の話者による約15分間の会話を8会話(母語話者間のものを3会話と、母語話者/非母語話者間のものを5会話)、米国某大学において録画撮りしたものである³⁾。また、会話を録画した直後、または、少なくともその三日以内に、全参加者に対し、参加した会話の印象・感想等について聞くフォローアップ・インタビューを行った⁴⁾。収録当時、母語話者(仮名:富士男, 小夜, 八重, 彩子, 次郎, 美砂, 俊, 隼人)と非母語話者(仮名:ナット, エミリー, リサ, ダニー, ベン)の参加者は、米国某大学の大学生または大学院生であった。また、母語話者の啓二は、アメリカ旅行中の日本の会社員であった。母語話者の美砂と俊は、それぞれ米国某大学のティーチングアシスタント(TA)として日本語の1, 2年生の授業を2年間担当していた。なお、非母語話者の第一言語はいずれも英語である。非母語話者は、収録当時、全員が同じ米国某大学の日本語クラスの三年生(日本語学習時間:500時間以上)に在籍していた⁵⁾。なお、収録した会話は、すべて文字化した⁶⁾。

3) 会話の録画撮りについては、中井(2003a)参照。

4) フォローアップ・インタビューについては、Kato [Nakai] (1999), 中井(2002)参照。

5) 参加者の詳しい属性については、Kato [Nakai] (1999), 中井(2002, 2003a)参照。

6) 文字化表記は、ザトラウスキー(1993)を参考に以下のような方法で行った。

(58-112)	1 話題中における始まりと終わりの発話番号
(...)	発話の省略
。	下降のイントネーションで文が終了することを示す。
,	ごく短い沈黙,あるいはさらに文が続く可能性がある場合の「名詞句,副詞,従属節」等の後に記す。
?	疑問符ではなく,上昇のイントネーションを示す。
—	「—」の前の音節が長く延ばされていることを示す。
//	同時発話
(1.5)	一秒以上の沈黙秒数(ストップウォッチで測ったもの)
{}	笑い等の非言語行動

3.2 話題区分と話題開始部／終了部

話題の切れ目の判断には、延べ40人に対して話題区分アンケート調査を行った。話題区分アンケート調査では、8会話それぞれに対し、その会話に参加していない日本語母語話者を1会話につき5人ずつ集め、録画した会話を2度見せ、話題の切れ目⁷⁾と話題のタイトルを書いてもらった。その後、鈴木(1995)の「内容区分」の基準を参考に、アンケート調査参加者が指摘した話題区分の一致した数と、話題タイトルの類似性を考慮に入れ、会話資料のそれぞれの話題区分の境界線とタイトル⁸⁾を決定した。なお、本稿では、この話題区分調査で区分されたまとまりを「話題」と呼ぶことにする。

分析対象とした話題開始部と終了部の範囲は、(2)の基準で決定した。話題開始部の範囲を決定するには、協力者が話題を開始している場合に適用される基準Aと、情報提供者が話題を開始している場合に適用される基準Bがある。一方、話題終了部の範囲を決定するには、情報提供者の発話を基にした基準Cが適用される⁹⁾。

(2) 話題開始部と終了部の認定基準

話題開始部

基準A. 協力者：情報要求(質問表現)

(例) 475J：うん、これ何だろ。

情報提供者：情報提供による応答

(例) 476K：テーブルマイクです。

7) 被調査者には「話題(トピック,内容のまとまり)」と説明した。

8) 各会話の話題タイトル一覧表、および、話題区分の認定基準についての詳しい説明は、Kato [Nakai] (1999), 中井 (2002, 2003a) 参照。

9) ただし、話題開始部における基準A, Bのそれぞれの発話の間に、前の発話の反復表現、言い直し、語彙等について聞き返す質問表現とその応答、重複発話が入る場合もある。話題開始部と終了部の認定基準についての詳しい説明は、Kato [Nakai] (1999), 中井 (2003a) 参照。

基準 B. 情報提供者：情報提供，同意要求

(例) 488K：すごい広いんですね，ここ，大学。

協力者：応答（あいづち，笑い，前の発話の反復表現，評価表現等）

(例) 489J：ふーん。

話題終了部

基準 C. 情報提供者：最後の実質的な発話による情報提供

(例) 481J：へー，これだけじゃ，不十分だなー。

協力者：複数の応答（あいづち，笑い，前の発話の反復表現，評価表現等）

(例) 482K：{笑い}

このような話題区分と話題開始部／終了部の認定基準を基にした結果，本研究で分析する 8 会話における総話題数は，149 話題（母語話者同士の 3 会話中 62 話題，母語話者／非母語話者の 5 会話中 87 話題）が認定された。また，そのうち，141 話題開始部（母語話者同士の 3 会話中 59 話題開始部，母語話者／非母語話者の 5 会話中 82 話題開始部）と，149 話題終了部（母語話者同士の 3 会話中 62 話題終了部，母語話者／非母語話者の 5 会話中 87 話題終了部）が認定された¹⁰⁾。さらに，話題開始部の情報提供者による発話総数は，母語話者同士の 3 会話合計で 97 発話と，非母語話者の 5 会話合計で 103 発話が認定された。話題終了部の情報提供者による発話総数は，母語話者同士の 3 会話合計で 154 発話と，非母語話者の 5 会話合計で 110 発話が認定された。これらすべてを分析対象とした。

また，会話例の中の話題区分の場所には線を引き，話題のタイトル番号の他，一話題中の発話番号範囲もそれぞれ括弧に示した。また，話題区分

10) 各会話の最後の話題は，話題開始部のない話題終了部のみとして分析したので，話題開始部と終了部の各合計は異なる。

の線から Lの上までの発話を話題開始部として、┐から下の発話を話題終了部として示した。

3.3 分析項目

【表A】の左側に、本稿で分析した話題開始部及び終了部で用いられる18項目の言語的要素の項目・配列・分類をまとめた。18項目の言語的要素は、1. 接続表現, 2. メタ言語表現, 3. 相互行為指標表現 “interactional markers” (Emmett 1996, 1998), 4. 応答表現, 5. 提題表現「は」, 6. 係助詞／格助詞の省略, 7. 指示表現, 8. 断片¹¹⁾, 9. 評価表現, 10. 「のだ」文, 11. 普通体, 12. 質問表現, 13. 接続助詞, 14. 終助詞, 15. 語尾母音の引き延ばし¹²⁾, 16. 倒置表現, 17. あいづち, 18. 反復表現からなる¹³⁾。また、これらの18項目の要素は、その特徴ごとに5つの分類に分けた。要素1から3は文頭要素, 要素4から8は文中要素, 要素9から11は述語的部分の要素, 要素12から16は文末要素, 要素17と18は相互行為的要素¹⁴⁾とした。

【表A】の右側に、本稿で分析した話題開始部及び終了部における情報提供者の言語的要素の使用数と使用比率¹⁵⁾を、母語話者（母語話者同士の3会話より計6名分合計）と非母語話者（母語話者／非母語話者の5会話より計5名分合計）別にそれぞれまとめた。10%以上用いられている要素に

-
- 11) 断片は、次の1)から7)までの発話末に終助詞が伴わないものを指す。1) 体言止め (例: 三年生。), 2) 接続詞だけで構成されている発話 (例: で。), 3) 形容動詞+に (例: 効率のいいように。), 4) 名詞+助詞 (例: 私が。), 5) 疑問詞だけで構成されている発話 (例: どう?), 6) て形だけで構成されている発話 (例: 行って。), 7) 接続助詞で終わっている発話 (例: 行ったから。)。また, 8) 他の話者に遮られて途中で終わっている発話, 9) 話者によって中断された発話 (例: 政治て, て,) も断片に含める。
 - 12) 語尾母音の引き延ばしは, 1) 語尾母音 (例: 行ったけどー。), 2) あいづちの母音 (例: うーん, へー。) が引き延ばされて発音されているものを指す。なお, 母音の引き延ばしの有無は筆者の耳で判断した。
 - 13) 詳しい用語規定は, Kato [Nakai] (1999) 参照。
 - 14) 相互行為的要素とは, 発話のどの位置にも現れ, 参加者同士の相互行為に基づいて用いられる実質的内容を欠いた言語的要素のことを指す。

【表A】 母語話者と非母語話者の情報提供者が話題開始部及び
話題終了部で用いた言語的要素

言語的要素の5段階の分類	18項目の言語的要素	話題開始部 (情報提供者)				話題終了部 (情報提供者)			
		母語話者同士		非母語話者		母語話者同士		非母語話者	
		使用数	使用比率	使用数	使用比率	使用数	使用比率	使用数	使用比率
文頭要素	1. 接続表現	17	17.5%	2	1.9%	14	9.1%	8	7.3%
	2. メタ言語表現	1	1.0%	0	0.0%	3	1.9%	0	0.0%
	3. 相互行為指標表現	54	55.7%	37	35.9%	30	19.5%	17	15.5%
文中要素	4. 応答表現	12	12.4%	24	23.3%	4	2.6%	19	17.3%
	5. 提題表現「は」	19	19.6%	15	14.6%	15	9.7%	3	2.7%
	6. 係助詞／格助詞の省略	10	10.3%	2	1.9%	5	3.2%	2	1.8%
	7. 指示表現	9	9.3%	1	1.0%	12	7.8%	1	0.9%
	8. 断片	25	25.8%	32	31.1%	52	33.8%	20	18.2%
	9. 評価表現	10	10.3%	9	8.7%	23	14.9%	18	16.4%
述語的部分の要素	10. 「のだ」文	22	22.7%	1	1.0%	13	8.4%	3	2.7%
	11. 普通体	18	18.6%	28	27.2%	50	32.5%	29	26.4%
	12. 質問表現	1	1.0%	10	9.7%	0	0.0%	4	3.6%
文末要素	13. 接続助詞	11	11.3%	3	2.9%	20	13.0%	4	3.6%
	14. 終助詞	24	24.7%	6	5.8%	30	19.5%	6	5.5%
	15. 語尾母音の引き延ばし	17	17.5%	15	14.6%	46	29.9%	13	11.8%
	16. 倒置表現	8	8.2%	1	1.0%	9	5.8%	2	1.8%
	相互行為的要素	17. あいづち	9	9.3%	14	13.6%	43	27.9%	35
	18. 反覆表現	5	5.2%	17	16.5%	6	3.9%	5	4.5%
開始部・終了部の情報提供者の発話総数		97		103		154		110	

20%以上：太字ハイライト 10%以上：ハイライト

- 15) 言語的要素の使用比率は、話題開始部及び終了部において用いられた各言語的要素の数を、話題開始部及び終了部において情報提供者の役割をする母語話者（3会話中6人）、または、非母語話者（5会話中5人）の発話の総数で割ったものである。例えば、話題開始部において情報提供者の役割をする母語話者の発話総数は、97発話であり、そして、その中で、17個の接続表現を用いている。よって、接続表現の使用比率は、17/97、つまり、17.5%となる。なお、話題開始部／終了部では、複数の同じ言語的要素が繰り返し用いられることもあるので、その場合もそれらすべてを合計し、使用数に含めた。したがって、表中の18項目の各言語的要素の使用比率はそれぞれ独立して計算しており、その合計は100%にはならない。

ハイライトを、20%以上用いられている要素に太字ハイライトを付けた。

以下、これら18項目の言語的要素が、母語話者と非母語話者の情報提供者によってどのように使われ、どのように話題開始部と終了部を構成しているのか、特徴的なもののみを取り出して分析する。そして、非母語話者が用いた言語的要素の改善点を考察する。

4. 分析

4.1. 情報提供者が話題開始部で用いる要素

【表A】によると、話題開始部で情報提供者の役割をする母語話者は、主に、相互行為指標表現 (55.7%)、断片 (25.8%)、終助詞 (24.7%) の他、接続表現 (17.5%) 等を多く用いており、非母語話者は、主に、相互行為指標表現 (35.9%)、断片 (31.1%) 等を多く用いていた。

会話例(3)は、話題開始部において、情報提供者の役割をする母語話者が多様な要素を用い、話題を開始している例である。この話題開始部では、58Aにおいて、協力者の彩子が八重のアメリカ留学について聞き、それに答える形で、情報提供者の八重は、59Yで、係助詞「は」の省略、相互行為指標表現「えっ」、断片、「のだ」文、接続助詞「けど」、語尾母音の引き延ばし「けどー」を用いている。

(3) 彩子 (A) = 母語話者 (協力者, 20代後半女性)

八重 (Y) = 母語話者 (情報提供者, 30代前半女性)

話題4：八重のこれまでの歴史 (58-112)

58A (情報要求・協力者)： 八重さんは、どんな感じなんですか？

→59Y (情報提供・情報提供者)： いや、私一、もう、いや、{笑い} えっ、

L 4年ぐらいになるんですけどー。

助詞「は」の省略、相互行為指標表現「えっ」、断片、

「のだ」文、接続助詞「けど」、語尾母音の引き延ばし

これに対して、【表A】によると、会話例(3)の母語話者の情報提供者の八重が話題開始部で用いていた言語的要素は、非母語話者の情報提供者では、特に、係助詞／格助詞の省略(1.9%)、「のだ」文(1.0%)、接続助詞(2.9%)がほとんど用いられていなかった。その代わりに、特に、質問表現(9.7%)、あいづち(13.6%)、反復表現(16.5%)が母語話者に比べて多く用いられていた。会話例(4)では、753Tにおいて、母語話者の協力者の役割をする俊が非母語話者のエミリーに週末の予定について聞いているが、情報提供者のエミリーはその質問表現が聞き取れず、754Eで「ん?」という質問表現で聞き返し、さらに、756Eで、755Tの「週末。」という発話を反復して確認している。このような語彙や発話の確認のためのやり取りが非母語話者の話題開始部に多く見られたため、質問表現、あいづち、反復表現等が情報提供者の母語話者より非母語話者の方が多く用いられていたものと考えられる。

- (4) エミリー (E) = 非母語話者 (情報提供者, 20代前半女性)
 俊 (T) = 母語話者 (協力者, 30代後半男性)

話題19：エミリーの週末の予定 (753-777)

753T (情報要求・協力者)： 週末は何しますか？

→754E (情報要求・情報提供者)：ん？ 質問表現

755T (情報提供・協力者)： 週末。

→756E (注目表示・情報提供者)：週末。 反復表現

757E (情報提供・情報提供者)：あーん、(1.3) 勉強 (1.1) するだけです。
 L

次に、話題開始部で情報提供者が用いていた評価表現、断片、接続表現に焦点を当てて、見てみる。

4.1.1 情報提供者が話題開始部で用いる評価表現

話題開始部において情報提供者により用いられた評価表現を調べた結果、母語話者同士の会話では、母語話者は、全部で10個の評価表現を用いており、そのうち5個は同意・確認要求の終助詞「ね」「よね」を文末に用い、それ以外の5個は「ね」「よね」を文末に用いていなかった。それに対し、非母語話者は、全部で9個の評価表現を用いており、そのうち1個しか同意・確認要求の終助詞「よね」を文末に用いておらず、残りの8個のうち、2個は、明らかに会話相手の方が情報をより多く持っているため、同意・確認要求の終助詞「ね」「よね」を用いるべきものであった。次の会話例(5)は、母語話者の情報提供者が話題開始部で終助詞を伴った評価表現を用いている例で、会話例(6)は、非母語話者の情報提供者が話題開始部で終助詞を伴わない評価表現を用いている例である。

まず、会話例(5)では、啓二は母語話者の情報提供者で、次郎は母語話者の協力者である。啓二は、次郎の在籍する大学に初めて訪れて、会話収録に参加しており、488Kにおいて、「ここ」という指示表現を用いて、次郎の大学に対する評価表現「すごい広いんですね、ここ、大学。」を倒置の形で発話し、同意要求の終助詞「ね」を用いて、次郎の同意を求め、話題を始めている。

(5) 啓二 (K) = 母語話者 (情報提供者, 20代後半男性)

次郎 (J) = 母語話者 (協力者, 20代後半男性)

話題20: 大学は広い (488-511)

→488K (同意要求・情報提供者): すごい広いんですね、ここ、// 大学。

指示表現, 評価表現, 終助詞「ね」, 倒置表現

489J (注目表示・協力者):

ふーん。

次に、会話例(6)では、ダニーは、非母語話者の情報提供者で、隼人は母

語話者の協力者である。会話例(6)の前に、隼人は自分の出身地、東京について話していた。そして、会話例(6)において、ダニーは212Dと213Dで、自分の日本語教師が東京はどこへ行っても混んでいると言っていたことに言及し、話題8を開始している。212Dで、ダニーが「先生によると」で発話を開始し、213Dで「混んでいます。」と述べ、発話を終わらせているが、ここでは、このような情報提供の形で話題を開始するのは少々奇妙な感じがする。なぜなら、東京出身の隼人の方が、東京についての情報をダニーより多く持っているはずなので、ダニーはただ情報を提示するよりも、隼人にこの情報について同意要求をするか、又は、真偽を確かめるような情報要求をした方が、適切であると言えるからである。例えば、情報提供者として、同意・確認要求の「ね」を用い、「先生から聞いたんですが、東京はどこへ行っても混んでいるそうですね。」等と同意・確認した方がより適切であると考えられる。

(6) ダニー (D) = 非母語話者 (情報提供者20代後半男性)

隼人 (H) = 母語話者 (協力者20代後半男性)

話題8：東京について (212-235)

→212D (情報提供・情報提供者): うん、先生によると、あー、東京はどこへ行ってもー、

→213D (情報提供・情報提供者): おー、混んで//います。

情報提供の評価表現

└ 214H (注目表示・協力者): 混んでいる。

4.1.2 情報提供者が話題開始部で用いる断片

話題開始部で情報提供者の役割をする際、母語話者同士の会話では、母語話者は、会話例(3)のように、会話相手から受けた質問に対し、相互行為指標表現等を用いながら即座に答えているのに対し、非母語話者は、質問

に即座に答えられない場合が見られた。そのような時、非母語話者は、会話相手の母語話者に語彙の助けを借り、そのために発話を途中で遮られる形になっていることがあった。この遮られる形で言い終わった発話は、断片の形をとり、非母語話者が話題開始部で用いた全断片32個のうち、7個も見られた。次の会話例(7)は、このような遮られた断片の例である。

会話例(7)では、エミリーは非母語話者の情報提供者で、俊は母語話者の協力者である。俊がエミリーに彼女のボーイフレンドが大学卒業後、2、3年就職していたかどうか尋ねた後に、話題開始部の会話例(7)が始まっている。514Eと516Eで、エミリーは、ボーイフレンドは日本で就職しないでアメリカに留学していたと説明しようとしたが、516Eで「勉強」という発話の後につまってしまった。そこで、俊は、516Eでエミリーが言おうとしていることを理解し、エミリーの発話「勉強、」を遮って、517Tで「勉強してたの。」と言い、エミリーの発話を完成させている。

- (7) エミリー (E) = 非母語話者 (情報提供者, 20代前半女性)
俊 (T) = 母語話者 (協力者, 30代後半男性)

話題14: エミリーのボーイフレンドがアメリカで何を勉強していたか
(514-538)

514E (情報提供・情報提供者): あーん, (1.5) アメリカに一,

515T (注目表示・協力者): あー。

→516E (情報提供・情報提供者): 勉強,

(遮られた)断片

└ 517T (注目表示・協力者): 勉強してたの。

これに対し、話題中間部の会話例(8)では、情報提供者である非母語話者ベンは、会話例(7)における母語話者の発話の助けに遮られた断片の発話をするエミリーと異なり、母語話者の啓二によって遮られることなく、発話を終わらせることに成功している。それは、恐らく、ベンは応答発話を発

する時間を稼ぐために、いくつかの要素を用いているからであると考えられる。ベンは、88Bで、相互行為指標表現「あー、あの一、ま、」と、回願的自己注目表示のメタ言語表現「いつだったんだっけー、」を用い、また、その語尾母音を伸ばすことにより、発話を続ける意志を示している。

(8) 啓二 (K) = 母語話者 (協力者, 20代後半男性)

ベン (B) = 非母語話者 (情報提供者, 20代前半男性)

話題 2 : ベンの日本留学経験 (31-110)

(...)

87K (情報要求・協力者): いつ行ったんですか?

→88B (情報提供・情報提供者): あー、あの一、ま、大学のいつだったんだっけー、

相互行為指標表現、メタ言語表現

→89B (情報提供・情報提供者): あの一、3年生の時? // かな。

相互行為指標表現

90K (注目表示・協力者): うん。

4.1.3 情報提供者が話題開始部で用いる接続表現

情報提供者が話題開始部で用いる接続表現は、母語話者の場合、17.5%用いているのに対し、非母語話者は1.9%しか用いていなかった。非母語話者が接続表現を用いずに情報提供により話題を始めているため、話題が唐突に変わっているように感じられるものが会話例(9)のように見られた。

会話例(9)の話題11では、八重は母語話者の情報提供者で、リサは非母語話者の協力者である。話題11で、八重は自分がアメリカ、特にミネソタに留学することを決意した理由を話していた。そして、話題11の終了部の382Yで、友人がいたためミネソタに来たのだと八重が説明すると、それに対し、リサは、383Lで「うん。」というあいづちのみ与えている。そして、八重が385Yで接続表現「だから」を用いたところで、話題11が終了してお

り、それに重なる形で、リサが386Lにおいて、「あ、夏は、ミネソタの一、」と発し、自ら情報提供者になり、新しく話題12を始めている。フォローアップインタビューによると、八重はこのリサの話題転換の仕方が唐突であると感じたらしい。その理由の一つには、話題12の開始部での接続表現の欠如が考えられる¹⁶⁾。話題12の開始部386Lで、接続表現「でも」を用い、「あ、でも、ミネソタの冬は寒いですよ。」という発話で始めていたならば、リサは情報提供者としてもう少し自然に新しい話題を導入できたのではないかと考えられる。なぜならば、接続表現「でも」を使うことにより、八重の前の話題「ミネソタには友人がいた」というミネソタに対する肯定的イメージの話題と、リサの新しい話題「ミネソタの冬は寒い」というミネソタに対する否定的イメージの話題を対比させることができ、この二つの話題を明確に関連付けられるからである。

(9) 八重 (Y) = 母語話者 (情報提供者, 30代前半女性)

リサ (L) = 非母語話者 (協力者, 20代前半女性)

話題11: 八重がアメリカに来た理由 (370-385)

(…)

「382Y (情報提供・情報提供者): で、私の友達もミネソタに、いたしー、

383L (注目表示・協力者): うん。

あいつち

16) 話題転換が唐突に感じられる他の理由としては、話題11の話題終了部において、協力者のリサがあいつちだけしか与えずに話題を終了していることも挙げられる。このような話題の終了の仕方は、話題に対する興味・共感を十分に示し切れていないと言いがたく、会話相手を落胆させかねない。例えば、383Lで、「ああ、なるほど。それはちょうどよかったですねえ。へー。」等のように、納得したということを示し話題の終結を表すあいつち「なるほど」(Maynard 1989: 61-62)、同意・確認要求の終助詞「ね」を用いた評価表現「それはちょうどよかったですねえ。」、母音を引き延ばしたあいつち「へー。」などを用いると、もう少しスムーズに話題が終わらせられたのではないかと考えられる。これらの発話により、話題の終結を相手に予期させ、徐々に終わらせることが可能になるからである。

384Y (注目表示・情報提供者): うーん。

385Y (情報提供・情報提供者): // だから。

リサ (L) = 非母語話者 (情報提供者20代前半女性)

八重 (Y) = 母語話者 (協力者30代前半女性)

話題12: ミネソタの冬 (386-397)

→386L (情報提供・情報提供者): あ, 夏は, ミネソタの一,

387L (情報提供・情報提供者): うううん。

388L (情報提供・情報提供者): 夏じゃない。

389Y (注目表示/情報提供・協力者): // 冬。

390L (情報提供・情報提供者): 冬は。|笑い|

391Y (注目表示・協力者): うん, 寒いー。|笑い|

4.2. 情報提供者が話題終了部で用いる要素

【表A】によると, 話題終了部で, 情報提供者の役割をする母語話者は, 主に, 断片 (33.8%), 普通体 (32.5%), 語尾母音の引き延ばし (29.9%) の他, 評価表現 (14.9%) 等を多く用いており, 非母語話者は, 主に, あいづち (31.8%), 普通体 (26.4%) の他, 評価表現 (16.4%) 等を多く用いていた。情報提供者の非母語話者は, 話題終了部で評価表現を16.4%用いていたが, 会話例の中には, 評価表現をあまり用いずに, あいづちを多用してスムーズに会話を終了していないものも見られた。以下, 情報提供者が話題終了部で用いるあいづちと評価表現に焦点を当ててみる。

会話例(10)は, 話題終了部において, 情報提供者の役割をする母語話者が評価表現, 普通体, 語尾母音の引き延ばし, 倒置表現等の多様な要素を用いて話題を終了させている例である。会話例(10)の話題4では, 八重は母語話者の情報提供者で, 彩子は母語話者の協力者である。106Yで, 八重が次の夏学期で卒業する予定だと述べており, それに対し, 彩子が107Aで, 「あっ, 卒業なんですか。」という反復による確認要求をし, 109Aで評価表

現「あーようやく。」を用いて八重の発話に協力し、そして、話題終了部の111Aで「どうでした?」と八重の大学生活について尋ねている。それに対し、八重は、112Yにおいて、情報提供の評価表現「長かった、ほんとに一。」で応答している。この評価表現は語尾を伸ばした普通体の倒置であり、これに続く笑いにより話題4が終わっている。

(10) 八重 (Y) = 母語話者 (情報提供者, 30代前半女性)

彩子 (A) = 母語話者 (協力者, 20代後半女性)

話題4: 八重のこれまでの歴史 (58-112)

(...)

106Y (情報提供・情報提供者): えー, 来年の夏で, 卒業という
// 感じですね。

107A (注目表示・協力者): あっ, 卒業なん// ですか。

108Y (情報提供・情報提供者): 4年制で。

109A (注目表示・協力者): あーようやく。

110Y (情報提供・情報提供者): はい。

┌ 111A (情報要求・協力者): どうでした?

→112Y (情報提供・情報提供者): // 長かった, ほんとに一。{笑い}

評価表現, 普通体, 語尾母音の引き伸ばし, 倒置表現

彩子 (A) = 母語話者 (情報提供者, 20代後半女性)

八重 (Y) = 母語話者 (協力者, 30代前半女性)

話題5: 彩子が取っているクラス (113-139)

113A (情報提供・情報提供者): もう, 私,

114A (情報提供・情報提供者): 2年だから短いだろうと思うんですけどー,

┌ 115Y (注目表示・協力者): うーん。

これに対して, 【表A】にあるように, 話題終了部で情報提供者の役割を

する非母語話者 (31.8%) は、母語話者 (27.9%) に比べ、あいづちをより多い比率で用いていた。このため、非母語話者は、会話例(11)のように、話題の終了を母語話者の実質的発話によってリードされていくような場合が見られた。

会話例(11)では、ナットは非母語話者の情報提供者で、美砂は母語話者の協力者である。ここでナットは、222Nの「うーん。」、225Nの「あー、そうです、」、227Nの「うん。」という同意のあいづちばかり用いており、話題に対する自分の気持ちをまとめた評価表現を用いて話題を終了させていかないため、代わりに、協力者の美砂が過剰な評価表現を用いて話題を終了させていることがうかがえる。221Mの「すばらしいじゃないですか。」、223Mの「よくできるんですねー。」、224Mの「頭がいいんですね。」、226Mの「あー、よかったですねー。」で、美砂は、ナットが競争率の高い奨学金を勝ち取ったことに対しての評価を述べている。このような誇張した褒め言葉は、今回分析した会話資料中、母語話者同士の会話には一つも見当たらなかった。このような褒め言葉の過剰使用により、美砂は、教師のように会話をリードしているかのように映る。ナットが否定の応答表現や評価表現により美砂の褒め言葉を否定しなかったため、美砂は、評価表現を続けて出すより仕方がなかったのではないかと思われる¹⁷⁾。

例えば、222Nにおいては、否定の応答表現、評価表現、母音を引き延ばした終助詞「よー」、倒置表現を用いた「いえ、ラッキーだっただけですよー、ほんとに。」、そして、225Nにおいては、否定の応答表現、評価表現、普通体の評価表現「いえ、そんなことないですよ。ほんとにラッキーでとてもよかったです。ほんとに嬉しかった。」等のような発話をナットが返していれば、美砂が過剰な評価表現を用いることなく話題もスムーズに終了していたのではないかと考えられる。

17) 美砂が評価表現を多用して話題を終了させた他の理由は、美砂がTAとして普段、日本語を教えており、学生に対し評価表現を多用するなどのティーチャートークをする習慣があったためではないかと思われる。

(11) ナット (N) = 非母語話者 (情報提供者, 20代前半男性)

美砂 (M) = 母語話者 (協力者, 20代後半女性)

話題 6 : ナットが日本に興味を持った理由 (118-227)

(...)

219N (情報提供・情報提供者) : 申し込んでー, 三人, もらった。

220M (注目表示・協力者) : へー。

母音を引き延ばしたあいづち

221M (注目表示・協力者) : すばらしいじゃないですか。

否定疑問の評価表現

→222N (注目表示/情報提供・情報提供者) : うー // ーん。

母音を引き延ばしたあいづち (同意)

223M (注目表示・協力者) : よくできるんですねー。

{笑い}

評価表現, 「のだ」文, 終助詞「ね」

224M (注目表示・協力者) : 頭がいいんですね。{笑い}

評価表現, 「のだ」文, 終助詞「ね」

→225N (情報提供・情報提供者) : あー, そうです, ラッキーです。

あいづち (同意), 評価表現

226M (注目表示・協力者) : あー, よかったですねー。

評価表現, 終助詞「ね」

→227N (注目表示/情報提供・情報提供者) : うん。

あいづち (同意)

ナット (N) = 非母語話者 (情報提供者, 20代前半男性)

美砂 (M) = 母語話者 (協力者, 20代後半女性)

話題 7 : 秋田での勉強 (日本語, 歴史, 書道) (228-267)

228M (情報要求・協力者) : えー, じゃ, えっとー, 秋田ではー, 日本語だけ?

229N (情報要求・協力者): 他にもいろいろ, 勉強 // するんですか?

230N (情報提供・情報提供者): あっ, に, 日本史も一,

5. 日本語教育への応用

以上, 本稿の会話資料では, 非母語話者は, 話題を転換するための言語的要素がうまく用いられないため, 母語話者と会話する際, 次の話題に唐突に入ったり, スムーズに話題が開始できなかったり, 話題を適当に終わらせたりするような印象を与えてしまうことが観察された。このようなことを改善するために, 日本語の教育現場では, どのような点に気を付けて指導していけばよいのか, 以下で検討する。

5.1. 話題開始部

話題開始部においては, 単に情報提供の評価表現よりも, むしろ, 終助詞「ね」や「よね」を文末に用いる同意要求の評価表現が自由に使えるように練習を行うべきである。この同意要求の評価表現により, 会話相手の同意を得, 相手を話題に引き込み, それと同時に自らの話題への参加姿勢をより強く示していくことが可能になる (会話例(5), (6))。

また, 非母語話者が発話を遮られたために言い終わらない形で終わる場合が見られる (会話例(7))。それは話し相手の母語話者が語彙の助けが必要だと感じるため遮るのだが, 実は, 非母語話者はその語彙は知っており, 必要なのは発話を組み立てる時間なのだということがしばしばある。Emmett (1996, 1998) は, 「あの」「えっと」は, 単に沈黙を埋めるだけでなく, 会話上の相互行為に関連して使われているので, これらを *interactional marker* (本稿では, 相互行為指標表現) と呼んでいる。話題開始部では, 母語話者は慎重に発話を構成したり, 適切な言葉を模索したりするときにこの相互行為指標表現を用いるという。したがって, 日本語学習者が発話を慎重に形成する際に十分時間が取れるように, 「あの」「えっと」「そうですねえ」などの相互行為指標表現や「何だったかなあ」など

のメタ言語表現、語尾母音の引き延ばし等が使用できるように練習を行うべきであると言える（会話例(3), (8)）。

最後に、話題開始部において、前の話題と新しい話題を関連づけてスムーズに転換していく方法が習得できるように、接続表現、特に、「でも」「で」「じゃあ」などの使い方の練習を行う必要があると言える（会話例(9)）。佐久間・鈴木（1993）の分析では、これらの接続表現は女子大生の日常談話で話題を転換する際に最も多く用いられるものであると報告されている。

5.2. 話題終了部

話題の終了部では、情報提供者の役割をする非母語話者が同意のあいづちのみ用い、話題に対する自分の姿勢をまとめた評価表現を適切に与えることが難しいようである。そのため、その協力者の役割をする母語話者が過剰な評価表現を用いる場合がある（会話例(11)）。したがって、日本語教育の現場では、自らが情報提供をする話題について評価表現を用いて、自分の話題に対する姿勢をまとめながら、話題を終了していく練習を行う必要があると言える。C. Goodwin & M. Goodwin (1992 : 171) は、評価表現を用いることにより、その話題への関心度、参加の度合いを高め、話題の最高の盛り上がり、クライマックスの頂点を示し、話題の終結を予期させると述べている（会話例(10)）。

6. まとめと今後の課題

以上、初対面の日本語母語話者と非母語話者による会話資料の分析を基に、話題開始部及び終了部における情報提供者の言語的要素の用い方の特徴と、それらの日本語教育への応用の必要性を述べた。本研究で得られた結果は、ほとんどが米国で暮らす初対面の20-30代の日本語母語話者と非母語話者による8会話だけの分析を基にしたものであるため、一般化するには制約があると言える。しかし、ここで得られた分析結果を、日本語学

習者がよりスムーズに話題を開始・終了しながら、円滑なコミュニケーションを行っていきけるような談話能力の形成のための教育の応用につなげられればと願う¹⁸⁾。

今後、母語話者と非母語話者による会話の、より多くのデータを基に、話題開始部、中間部、終了部といった話題全体の中でいかに言語的要素が用いられ、話題が展開されているかをより綿密に分析していきたいと思う。また、会話へのより積極的な参加態度を示す談話能力の形成のための具体的な指導項目と指導方法についての研究¹⁹⁾とその種類の拡大も今後の課題にしたい。

謝辞

本稿は、1999年5月提出の修士論文、“Topic shifting devices used in Japanese native/native and native/non-native conversations”の一部を和訳改訂し、2000年11月の韓国日本学会/日本語教育学会共催第61回学術大会（国際シンポジウム）において発表したものを修正したものである。執筆に当たり、米国ミネソタ大学のポリリー・ザトラウスキー準教授、及び、早稲田大学の佐久間まゆみ教授に御指導頂いた。深く感謝申し上げます。さらに、本稿で使用した会話の参加者、話題区分調査の被調査者の方々にも感謝の意を表したい。

-
- 18) 本稿で示唆した話題開始部と終了部で用いられる言語的要素の日本語教育での応用は、日本語母語話者の話し方の規範を「絶対的に正しいもの」として固定的に捉え、学習者に押し付けようとするものではない。学習者が自分にとって必要だと感じるものを自由に選択して用いていけるような環境作りが大切であると考え。また、会話例(7)の俊と(11)の美砂に見られたような非母語話者の発話構成の援助など、会話相手の母語話者からの歩み寄りの姿勢も重要であると考え。母語話者/非母語話者間のコミュニケーションにおける相互の歩み寄りの姿勢については、岡崎(1994)、青木他(1998:108-109)参照。
- 19) 本研究の分析結果等を基にして作成した、談話能力の向上を目指した会話指導項目リストは、中井・大場・土井(2004)参照。また、そのような会話教育のために、ビジターセッション、会話分析活動・演劇プロジェクト、ストーリーテリングの手法を用いて談話能力の向上を目指した授業の実践報告は、中井(2003b, 2004a, 2004b)参照。

参考文献

- 青木直子他 (1998)「第二言語話者と第一言語話者とのやりとりにおける理解達成のプロセス」『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究』(「平成6年度～平成8年度 科学研究費補助金(基盤研究(A)) 研究成果報告書」) 研究代表者土岐哲, 課題番号06301099) pp.80-123
- 岡崎敏雄 (1994)「コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化—日本人と外国人の日本語—」『日本語学』13巻13号 pp.60-73 明治書院
- 佐久間まゆみ・鈴木香子 (1993)「女子学生の日常談話の接続表現」『国文目録』第32号 pp.31-48 日本女子大学国語国文学会
- ザトラウスキー, ポリー (1993)『日本語の談話の構造分析-勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- 鈴木香子 (1995)「内容区分調査による『話段』認定の試み」『国文目録』第34号 pp.76-84 日本女子大学国語国文学会
- 中井陽子 (2000)「母語話者同士及び母語話者/非母語話者による日本語会話の話題転換部に使われる要素—情報提供者の場合」韓国日本学会/日本語教育学会共催 第61回学術大会(国際シンポジウム) 予稿集 pp.158-165
- (2002)「初対面母語話者/非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる質問表現と会話の理解・印象の関係—フォローアップ・インタビューをもとに」『群馬大学留学生センター論集』第2号 pp.23-38 群馬大学留学生センター
- (2003a)「初対面日本語会話の話題開始部/終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第16号 pp.71-95 早稲田大学日本語研究教育センター
- (2003b)「談話能力の向上を目指した会話教育—ビジター・セッションを取り入れた授業の実践報告」『講座日本語教育』第39分冊 pp.79-100 早稲田大学日本語研究教育センター
- (2004a)「談話能力の向上を目指した総合的授業—会話分析活動と演劇プロジェクトを取り入れた授業を例に」『小出記念日本語教育研究会論文集』第12号 pp.79-95 小出記念日本語教育研究会
- (2004b)「ストーリーテリングのテクニク指導の実践報告」『日本語教育方法研究会誌』vol.11 No.2 pp.4-5 日本語教育方法研究会
- ・大場美和子・土井真美 (2004)「談話レベルでの会話教育における指導項目の提案—談話・会話分析的アプローチの観点から見た談話技能の項目」『世界の日本語教育』14号 pp.75-91 国際交流基金 日本語国際センター
- Emmett, Keiko. 1996. Contribution of the interactional markers *ano (o)*, *eeto*, *uun (to)* and *nanka* to the development of Japanese conversation. University of Minnesota: MA thesis.
- . 1998. ANO (O) is more than “um”: Interactional functions of ANO (O) in Japanese conversation. Proceedings of the fifth annual symposium about language

- and society-Austin, ed. by Mani Chandrika Chalasani, Jennifer A. Grocer and Peter C. Haney. *SALSA V. TCF 39*: 136-148.
- Goodwin, Charles and Marjorie Goodwin. 1992. Assessments and the construction of context. *Rethinking context*, ed. by Alessandro Duranti and Charles Goodwin, 147-189. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kato [Nakai], Yoko. 1999. Topic shifting devices used in Japanese native/native and native/non-native conversations. University of Minnesota: MA thesis.
- Maynard, Senko. 1989. *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. New Jersey: Ablex Publishing Corporation.
- Nakai, Yoko Kato. 2002. Topic shifting devices used by supporting participants in native/native and native/non-native Japanese conversations. *Japanese Language and Literature*. 36: 11-25.